

復活節第1主日イースター礼拝 説教 「甦りのキリスト」要旨
牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2022年4月17日

ヨハネによる福音書 20:1~18

イースターおめでとうございます。皆さまと一緒に主の復活をお祝いすることが許され、感謝します。それゆえ、その私たちの願いは、主の復活によって始まったこれよりの新たな時が復活の希望とその喜びに包まれながら歩むことでもあります。そこで、その私たちに与えられた御言葉がこの日の御言葉です。その最初のところには「週の初めの日」とありますが、このことはつまり、イエス様の弟子たちと同じようにイエス様の復活の場面に立ち会っているのがこうして御言葉に聞いている私たちであるということです。そして、このことはまた、イエス様が弟子たちの足を洗われたその時、「私のしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」とペトロに向かってこう仰ったことの意味が、私たちには今はっきりと分かったということです。それは、私たちがイエス様の十字架の出来事を経て復活の出来事へと導かれていったからでもあります。ところが、この日の御言葉が先ず私たちに伝えてくれていることは、喜びに包まれた私たちとはまったく正反対の弟子たちの姿です。ただ、それはとても不思議なことです。なぜなら、イエス様の復活については、かねてイエス様より繰り返し聞いてきたことであり、弟子たちにとって復活は既定路線のはずだからです。ところが、御言葉は、復活の朝の弟子たちのちぐはぐな姿を語るのです。それゆえ、御言葉もまた「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである」と語るわけですが、しかし、だから、彼らが分からないままであったわけではありません。分からなかった者が分かる者とされる、それが復活の朝に起こった出来事だということです。

主の日の朝、イエス様の墓に最初に詣でたのはマグダラのマリアでありました

が、ところで、この事実に触れて皆さんは何を思うのでしょうか。十字架の出来事は、弟子たち始め、イエス様の周辺にいた人々の気持ちをどん底に突き落とすものでもありました。それゆえ、人々にとっては、イエス様の言葉のすべてが頭の中からきれいさっぱり消え去ってしまったとしても不思議ではありません。近い者にとってはそれほど大きな衝撃であったからです。それゆえ、イエス様の復活を信じて主の日の朝を迎えた者は一人もおりません。そして、それは、最初にイエス様の墓に詣でたこのマグダラのマリアもそうでした。復活すると信じて墓を詣でたのではなく、その悲しみゆえにイエス様の墓を訪ねずにはいられなかった、それがこの時にマリアでもありました。ですから、その墓が空であったわけですから、マリアも激しく動揺することになりました。御言葉はその時の様子を「主が墓から取り去れました。どこに置かれているのか、私たちには分かりません」と動揺激しいマリアの姿を伝えるのですが、ただ、そうした人の心の動きは次から次へと他の人に伝わるものです。御言葉は、ペトロ、イエス様の愛弟子へと、その動揺が次から次に広がって行く様子を伝えるのですが、それゆえ、マリアのしたことは、こうして後から振り返るならば、傍迷惑なことであったとも言えるのでしょうか。なぜなら、この日の御言葉も語っているように、イエス様の復活は、御言葉を信じる者にとっては必ず起こる出来事であったからです。

しかし、先ほど、そのマリアが最初に墓に詣でたということについて皆さんどう思われたのかとお尋ねしましたが、この傍迷惑とも思えるマリアの行動は、御言葉に素直に聞いていくなら、それは、傍迷惑なだけのもではありません。私たちの信仰においてはむしろ大切なものであり、しかし、だから、傍迷惑ではなかったのかといえ、そうでもありませ

ん。動揺激しいマリアの行動によって明らかにされたことは、イエス様の復活の真実がその日の朝を迎えれば自動的に誰にでもすぐに分かるものではないということでした。このことはつまり、イエス様のお側近くでこれまでを過ごした人たちにとって、この事実は、信仰的に恥をかかされたと、後々必ずそう思わせるほどの出来事であったということです。それゆえ、これが傍迷惑でないはずはありません。けれども、復活の事実はそこから始まっていった、それも、冷静にあれこれ考えて行動する人から始まったのではなく、いても立ってもいられないといった、ある意味、自らの感情に流された人からイエス様の復活を巡るこのドタバタ劇が始まっていったということです。しかし、だから、感情に流されていいというわけではありません。このマリアに向かって、復活のイエス様が「婦人よ、なぜ泣いているのか。」と尋ねているように、それ自体をだから仕方がないこととして片づけることはできないからです。けれども、それがなければ、その先が始まることもなかったのもまた事実なのです。ですから、物事を冷静に受け止め、整理したいと願う人にとっては、恐らくは、こういうドタバタ劇は我慢ならないものでもあるのでしょうか。けれども、だからこそ、この整理できないものが大事だと、御言葉は私たちにそう語ってくれているようにも思うのです。そして、そこで私たちが忘れてはならない点は、いても立ってもいられずに行動したのがマリアという女性であったということです。ただし、そこで申し上げたいことは、いわゆるジェンダーと言われていることではありません。最初に女性が動いたという事実を御言葉が先ず記しているのは、イエス様の復活の出来事を、御言葉が家族の問題として捉えていると言えるからです。

復活の事実が家族の問題として捉えられているということはつまり、そこで一番に問うべきは、一般論としてそれが正しいか間違っているかということではありません。従って、復活の受け止め方について、御言葉が理性的に描いていない

のはそのためです。それは、まず最初に描かれているものが、その人それぞれの個性であり、性格であり、それも、家族にしか分からないその人の有り様であるように、主の復活の出来事は、合理的に理性的に説明できるものではないからです。そして、それは、御言葉が何も考えていないからではありません。人間というものを、その造られた当初からずっと長く見てきたのが神様であり、その人間に対して与えられたものがイエス様の復活の出来事でもあるからです。つまり、主の日の朝の出来事は、その私たち人間のことをよくよく分かった上でのことだということです。しかし、へそ曲がりの私たちはそれが気に入らない、それは理屈に合わないからでもあります。けれども、感情に流され、感情に溺れ、いても立ってもいられずにイエス様の墓を詣でた人から始まって、次から次へと明らかにされていったのが御言葉の伝える復活の出来事でもありました。復活の出来事が家族内でよくあるようなドタバタ劇に見えるのはそのためです。けれども、分からないことが分からないまま終わるのではなく、分かるようにされていく、このことはつまり、復活の出来事は、神様がそんな私たちのことをよくよく分かった上で与えられたものであったということです。

マリアがイエス様の甦りを知ったのは、「マリア」とイエス様から自分の名前を呼ばれた時のことでありました。ですから、喜びの余りイエス様にすがりついたというのはよく分かります。私だって同じことをしたと思います。ところが、イエス様がそのマリアに言ったことが「私にすがりつくのはよしなさい。まだ、父のもとへ上っていないのだから」というこの一言でありました。それは、神様のご計画においては、復活は一つの通過点に過ぎなかったからです。つまり、復活にはその後があるということです。従って、イエス様が復活なさったということを知り、分かるということは、この後のことを含めてのことでもありません。そして、その後のこととはつまり、イエス様が父なる神様のところに上

げられるということです。そして、イエス様は、それを他の兄弟たちのところに行って伝えるようにマリアに命じたのですが、ところで、復活の事実を他の人に伝えるということはどういうことなのでしょう。

伝えるということは、自らの経験を自らの言葉をもって語るということです。そして、それは、いわゆる、伝書鳩のように、ということではありません。そこで明らかにされることは、自らの経験であり、経験した自分自身についてです。それゆえ、それはただ単に事実関係を羅列するに留まりません。そこで現されるものには驚きや喜びがあり、そして、そこにはまた、そこに至る以前の悲しみ、動揺、恐れなど、自分が感じたもののすべてのものが含まれており、それを人に伝えるということです。従って、普段、私たちが伝道と呼んでいることはそういうものであるということです。人に何かを伝えるということが気持ちに溺れ、気持ちに沈むだけでは何も伝わらないように、そこは、合理的で理性的な言葉が求められますが、けれども、それだけで大事な何かは伝わるわけではありません。復活の出来事を伝えるということは、合理的なものも、合理性を欠いたものも、復活のイエス様と出会う中で経験したすべてのことを言葉をもって他の人々に伝えるということつまり、それが伝道というものだということです。

しかし、それはまた、それゆえにおかしくもあり、悲しくもあり、苦しくもある、ドタバタ劇はそれゆえのことでもあります。けれども、このマリアの姿が明らかにすることは、その中で私たちは間違いなくイエス様と出会うということです。そして、そこで大切なことは、私たちがイエス様との間の距離です。距離があるからこそ、私たちはイエス様の言葉に聞いていくことが許されるのですが、それゆえ、私たちが近づきすぎるとイエス様は離れ、またその反対に、遠ざかりすぎると近づかれるのはそのためです。そして、その繰り返しの中で知られることが神様のご計画でもあります。このご計画とは、終わりの日に復活

のイエス様と再会する私たちが神の国へと招き入れられるということです。そして、この神様のご計画を、私たちはイエス様を通して知らされるのですが、それがぎゅっと詰まった形で語られているのが、このイエス様が復活の出来事であり、そして、そのすべてを語っているのが聖書の御言葉でもあるのです。

そこで、この神様のご計画についてありますが、それをイエス様の復活の出来事を通して聞いていくとき、そこではっきりすることは、それが、後になってからしか分からないということです。そして、そこでもう一つ言えることは、後になってからしか分からないということは、私たちは間違えることがあるということです。復活の朝のドタバタはそのことを私たちに教えてくれているわけですが、けれども、そこで大事なことは、すぐに分からなくても、また間違えたとしても、それでも私たちはバラバラにはならないということなのです。それは、そこにイエス様が共にいてくださっているということはそういうことでもあるからです。そこで、このイエス様が共にいてくださっているということを考えていのですが、そのことを私たちが知っていくのは、自らの感情を交えて具体的事実に触れた上でのことだということです。それが復活の朝に起こった一つ一つの出来事でもあります。それゆえ、そこで大事なことは、そこにイエス様がいてくださっているということです。そして、それは、その時に限ったのではなく、イエス様が父なる神様の御許に上げられた後も、今この時も変わらずに続いているものであり、イエス様の復活の出来事は、この神様の御心とそのご計画を明らかにするものだということです。しかし、それがはっきりしたとしても、だから、私たちはそれで何一つ間違わないということではありません。

胸に手を当ててみれば誰でもよく分かることではありますが、何一つ間違いを犯さないと言える者は私たちの中には一人もおられません。私たちがそういう自分自身、そういう身近な人、私たちが人を赦すことができないのはそのためです。そ

して、それは、私たちが間違いを恐れすぎているからでもあります。もちろん、だから、開き直って間違えていいんだということではありません。十字架から復活へと、この時間の経過の中に私たちが置かれているということは、私たちが自分が想定する範囲では生きていないということを明らかにします。けれども、そうした中に共に生きているのが私たちであり、イエス様はその私たちと共におられるのです。ですから、この共にいる、共にあることを私たちが見失わない限り、振り返ってみて、私たちに、イエス様のなされたことも自分のしたことも、すべてのことの意味が明らかにされるのです。従って、十字架から復活へと向かう私たちの歩みは、間違っていないか、間違っているかが問われているわけではありません。そして、それは、御言葉が語る、愛や正しさについても同じことが言えるのです。なぜなら、「今私は愛をやっているよね」、「今私は正義をやっているよね」と私たちがいくら叫んでみても、その真実は振り返ってみなければ分からないことでもあるからです。ペトロが鶏が二度鳴く前に三度あなたは私を知らないと言われたことがまさにそのことを現してもいるのですが、ところが、そのペトロの前にも現れ、言葉をかけられたのが復活のイエス様でありました。

このように、間違った者、過ちを犯した者、裏切った者とさえつながり続けているのがイエス様であり、ですから、私たちが十字架と復活を基にした信仰というものを理解するには、そういうつながり方を意識することがとても大事になってくるのです。そして、ここでは、復活のイエス様を巡ってのこのドタバタなんだと思います。それは、だからドタバタしていればいいということではありません。このドタバタは復活のイエス様と共にある中で起こったことであり、その私たちがその中でイエス様と出会って、そこで知らされたことがイエス様の復活であったということです。ですから、そのイエス様について語り続けてきた主の教会を神の家族と呼んでいるのは、そこに

教会の一つの見識があるように思いま
す。なぜなら、そこには必ずドタバタがあり、このドタバタは終わりの日までなくなることなく続いていくものでもあるからです。イエス様に繋がっているからこそ起こることであり、けれども、そうであるからこそ、イエス様がその私たちと共にいてくださっていることが余計にはっきりすることになるわけです。ですから、教会は箱庭のような予定調和に満ちた世界ではありません。復活の事実が伝えてくれているように、そのドタバタを美しい言葉で飾り立て、今この瞬間だけの満足が得られればそれでいいというものではないからです。それは、そこにいるのが私たち人間であり、人間には必ず二面性があるからです。

イエス様の復活の場面におかれた人々がそうであるように、私たちには合理的に物事を受け止める面と合理性に欠いた面とのこの両面があります。そして、そのそれぞれを含め、私たちは私たちであるのです。けれども、復活のこの場面で明らかにされたことは、その私たちとイエス様が飽きずに懲りずに根気よく付き合ってくださいということなのです。そして、そのように過ちを繰り返す、このいい加減な私たちと、イエス様は嫌々付き合っているわけではありません。マリアとのやり取りを見ていて思うことは、イエス様がそういう私たちとの繋がりを喜んでおられるということです。つまり、そういう私たちのことを本当に支えてくださっているということであり、そういう子供っぽさ、どこまで行っても幼さの抜けきらない私たちとどこまでもどこまでも共にいてくださっているのが私たちのイエス様であるということです。まただから、神様の子どもと御言葉は私たちのことをそう呼んだりもするのですが、イエス様が復活なされたその朝、私たちが知らされ、分かったことは、この私たちとイエス様の関係性であったと思うのです。ですから、私たちは心の底から喜びの声を上げるのです。「イースターおめでとうございます」と。祈りましょう。